

**蔵の街を活かしたまちづくりワークショップ事業
実 施 報 告 書**

平成30年1月

栃木市総合政策部蔵の街課
宇都宮大学教育学部陣内研究室

目 次

【事業概要】

I. 蔵の街を活かしたまちづくりワークショップ事業概要	2
-----------------------------	---

【事業記録】

I. 視察調査（鹿沼市ネコヤド地区）	5
II. 倉の街現地調査、ワークショップ①	7
III. ワークショップ②	10
IV. 蔵の街を活かしたまちづくりに関する提案発表会&講演会	12

【提案内容】

1班 地域の輪でつくる蔵の街	15
2班 タイムトラベル蔵の街	20
3班 市民が輝ける蔵の街	26

事業概要

I. 蔵の街を活かしたまちづくりワークショップ事業概要

1. 目的

蔵の街に関わる団体等から選出いただいた若い方と大学生を構成員として、蔵の街を活かしたまちづくりのためのワークショップを実施し、栃木市蔵の街の現状と課題を整理するとともに解決策を提案いただくことにより、蔵の街を活かしたまちづくりの推進を図る。

また、成果発表の場としての「発表会」を開催することにより、市民意識の啓発を図り、市民協働による「蔵の街とちぎ」活性化の契機とする。

2. 主催・運営

- ・主催：栃木市
- ・運営(委託)：宇都宮大学陣内研究室

3. 参加予定者

- ・蔵の街に関わる団体等からの選出者
- ・一般公募者
- ・宇都宮大学学生
- ・市職員

4. 内容

実施日	内容	場所	時間
8月27日(日)	視察研修(鹿沼市ネコヤド地区)	鹿沼市	12:30~16:30
10月1日(日)	蔵の街の現地調査	市街地	9:30~12:00
	ワークショップ①	市庁舎	13:00~15:30
10月15日(日)	ワークショップ②	市庁舎	13:00~15:30

(※8月27日(日)は、市バスを利用)

5. 提案発表

12月9日(土)、宇都宮大学学生によりワークショップのまとめとして、提案発表を実施してもらう。また、同時にまちづくりに関する講演会も開催する。

[日時] 平成29年12月9日(土) 午後2時00分~4時30分

[場所] 栃木市役所3階 正庁

[内容]

- ・第1部：提案発表会（午後2時00分～3時15分）

「蔵の街を活かしたまちづくりに関する提案発表会」

（発表者：宇都宮大学陣内研究室学生）

- ・第2部：講演会（午後3時30分～4時30分）

「鹿沼市ネコヤド地区に学ぶ」（講師：ネコヤド地区仕掛人 風間教司氏）

※風間氏には、提案内容に対するコメントもいただく。

6. その他

- ・蔵の街に関わる団体等からの選出者については、直接、各団体に依頼する。
- ・一般公募者については、広報とちぎ等により募集する。

事業記録

I. 視察調査（鹿沼市ネコヤド地区）

2017年8月27日（日） 12:30~17:30

1. オリエンテーション 13:30~14:45（旅館シカクにて）

（1）事業の概要

- ・本事業の概要説明、参加者の自己紹介などを行った。

（2）ネコヤド地区に関する講話 風間教司氏（有限会社風間総合企画代表取締役）

- ・本ワークショップのように若者が参加していることは大きな魅力。
- ・路地裏にある自宅を自ら改修（セルフリノベーション）し、カフェ饗茶庵をオープン。数年後に隣接する空き家を友人が改修し、レストランをオープン。徐々に、事業が軌道に乗っていった。現在は、鹿沼で2店、日光市（今市、旧日光）で2店、カフェを営業。いずれもセルフリノベーションである。
- ・若者の中から出店に関する相談が増えたことから、路地空間を活用したマルシェ「ネコヤド商店街」（当初はネコヤド大市）を開催。ネコヤド商店街の出店者の中から、ネコヤド地区の空き店舗をリノベーションした出店者が増えていった。
- ・リノベーションはなるべく出店者自らが行い初期投資を抑制。そのことで事業性を高めた。また、マルシェ出店が、事業可能性の検証、顧客開拓につながっていった。



2. ネコヤド地区のフィールド調査 14:45~15:45

- ・グループ毎にネコヤド地区のフィールド調査を行った。



3. 振り返り 15:45～16:10 (旅館シカクにて)

質問 「事業が軌道に乗るきっかけはあったのか？」

風間 「饗茶庵の隣にレストランがオープンした時、ネコヤド商店街の集客が拡大した時期に大きな動きを感じた。マスコミに的確に情報を提供することも重要である。」

質問 「栃木市の強みと弱みは？」

風間 「強みは蔵の街としてのブランドが確立されていることと東京へのアクセスがよいこと。弱みは以上の強みを活かしたまちづくり誰が担うのか、ということ。」



II. 蔵の街現地調査、ワークショップ①

2017年10月1日(日) 9:30~15:30

・栃木市役所第5会議室

1. ガイダンス 9:30~9:45

・本日のスケジュール、現地調査の方法や注意事項、栃木市のまちづくりに関する説明などを行った。

2. 現地調査 9:45~12:00

・各グループにデジタルカメラ、マップなどを用意。

・各グループで、撮影係、記録係など役割分担を話し合っ

て蹴って。
・蔵の街エリアを3ブロックに分け、各グループが2ブロックを担当。3名の観光ボランティア(各グループに1名)の案内で現地調査を行った。



3. ワークショップ① 13:00~15:25

(1) 前回の振り返りと共有 13:00~13:20

・各グループで鹿沼フィールド調査の振り返りを行い、蔵の街をいかしたまちづくりに参考になる点などを共有した。

(2) 現地調査のまとめ 13:20~15:00

・各グループで、蔵の街の良い点、問題、可能性の観点から現地調査のまとめを行った。



(3) 発表と共有 15:00～15:25

- ・各グループのまとめを発表し全員で共有した。

【1班】

- ・「人が集まる」を縦軸、「手がつけやすい」を横軸とする図上に付箋を添付し整理した。インフラ関係、市民の地域理解、ターゲットなどについて次回以降、検討を深めることになった。



【2班】

- ・「栃木駅から伝建地区まで魅力が止まらない！」というメインコンセプトがまとまった。
- ・栃木駅～蔵の街～嘉右衛門町の回遊性を創出していくことが、蔵の街にとって重要ではないか、という論点である。



【3班】

- ・蔵の街を3ゾーンに分け、それぞれの良いトコ、悪いトコを整理した。
- ・「うなぎのねどこゾーン」の良い点は長屋の奥まで入れて楽しいことであり、悪い点は入りやすい雰囲気ではない（閉鎖的）ということであった。
- ・「寺ゾーン」の良い点は第二公園が憩いの空間として素敵であり、悪い点はお寺それぞれの特徴が分かりづらいということであった。
- ・「歌麿通りゾーン」の良い点は歌麿のポスターをお店が掲出している点、悪い点はシャッター街になってしまっていることであった。
- ・総括として、基本コンセプトを「フォトジェニックTOCHIGI」とした。現代の若者は写真映えるモノやコトに関心があるため、蔵の街全体を写真撮影の舞台にしようというものである。



Ⅲ. ワークショップ②

2017年10月15日(日) 13:00~15:30

・栃木市役所第5会議室

1. ガイダンス 13:00~13:10

・本日のスケジュールと目的の説明などを行った。

2. とりまとめワークショップ 13:10~15:00

(1) 前回の振り返りと共有 13:10~13:20

・各グループで前回の現地調査及びワークショップの振り返りを行った。

(2) 蔵の街をいかしたまちづくり提案の検討 13:20~15:00

・各グループで、蔵の街をいかしたまちづくり提案について検討した。

・今回は参加者が多く活発な議論が展開された。



3. 発表と共有 15:00~15:25

・各グループのまとめを発表し全員で共有した。

【1班】

・ツクツク(客を3人乗せることができる三輪車)をいかした観光地巡り、市役所新採限定のシェアハウス(1階にコミュニティカフェと駄菓子屋)、蔵を活用したお化け屋敷などの提案があった。



【2班】

- ・嘉右衛門町まで範囲を拡げれば、江戸～明治～大正～昭和の各時代の面影があることから、「タイムスリップ」をキーワードに検討した。また、観光客、生活者双方にとって交通面での課題が多いことから、車を抑制する移動手段の提案をした。
- ・上記に加え、下駄の日など蔵の街ならではのイベントを実施することを検討した。



【3班】

- ・縦軸を蔵の街の魅力（高い、低い）、横軸をソフト・ハードとし、その図に、検討した要点を記した付箋をプロットした。
- ・その結果、それぞれが関連していることが明らかとなり、ソフト・ハード両方に関連して魅力の低い点を改善し、魅力の高い点をさらによくしていく提案を深めていくこととした。



4. おわりに 15:25～15:30

- ・12月9日提案報告会&講演会のチラシを参加者に配付するとともに、当日についてアナウンスした。

IV. 蔵の街を活かしたまちづくりに関する提案発表会&講演会

2017年12月9日(土) 14:00~16:45

・栃木市役所(3階) 正庁

1. 開会
2. 主催者挨拶
3. 第1部：提案発表会「蔵の街を活かしたまちづくりに関する提案発表」

14:15~15:30

■1班：地域の輪でつくる蔵の街(宇都宮大学3年：都留、高久)

- ・提案の柱は、新卒採用多機能シェアハウス、蔵の街オリジナル人力車、蔵ローテーションイベント
- ・風間氏講評：新卒採用多機能シェアハウスは斬新であり成功すればかなりのインパクトがあると考えられる。オリジナル人力車は道交法の問題をクリアできれば面白いプロジェクトになる。ローテーションイベントは、蔵の街全体を元気にするという意味で良い提案である。
- ・質疑：蔵の街のエリア内にシェアハウスとして利用できる空き家があるかどうかキッチンと調べる必要がある。トウクトウクの活用についてだが、他の地域で事例はあるのだろうか(答：活用例はある)。



■2班：タイムトラベル蔵の街(宇都宮大学3年：飯見、菊地)

- ・提案の柱は、桐下駄の日、蔵ディング、タイムトラベル蔵の街
- ・風間氏講評：桐下駄の日については、楽しんで参加してもらえそうな工夫が重要。蔵ディングなども素敵な提案ではあるが、継続性を持たせるには金を稼ぐことも重要である。
- ・質疑：栃木市は職人をあまり大切にしていなかったということもあり、今回の提案は重要と感じる。コスプレ的な仕掛けを考えてもよいのでは。埼玉県与野市は大正ロマンのまちづくりを進めている。



■3班：市民が輝ける街蔵の街(宇都宮大学3年：大木、落合=欠席)

- ・提案の柱は、長屋プロジェクト、和装ラン
- ・風間氏講評：長屋プロジェクトのような発想は重要である。実際、広島県尾道市のNPO法人尾道空家再生プロジェクトは、類似した取り組みを進めている。
- ・質疑：栃木市中心街は、観光資源が意外とコンパクトに立地している。そのようなことを検証することも重要。



4. 第2部：講演会 15:45～16:45

「鹿沼市ネコヤド地区に学ぶ」

講師：ネコヤド地区仕掛人・内閣府地域活性化伝道師 風間教司氏

- ・市長あいさつに続き風間氏の講演を行った。



- ・風間氏は「ばしょづくり、ひと（なかま）づくり、ことづくり」を仕掛けてきた。
- ・ネコヤド大市（商店街）は「ばしょづくり」
- ・DANNAVISIONは「ひと（なかま）づくり」
- ・旅館CICACUは「ことづくり」
- ・地域で稼ぎ、それを地域に再投資する。それを続けていける仕組みづくりが重要。



5. 閉会

提 案 内 容

「地域の輪でつくる蔵の街」

○新卒採用多機能シェアハウス

○蔵の街オリジナル人力車

○蔵ローテーションイベント

宇都宮大学教育学部陣内研究室 高久瑛馬 都留凌

1. 目的

- * 栃木市役所と地域が深く関わる機会を新たに設け、市民と行政との協働の新たなステージを切り開く。
- * 栃木市役所新卒採用者と地域の関係を密にすることで、新卒採用者の地域理解を深める。
- * 市外、県外からの観光客を獲得し、蔵の街を中心に栃木市全体を活性化する。

2. 提案の背景

蔵の街のフィールド調査（本年 10 月 1 日）やワークショップ（本年 10 月 1 日、15 日）において、空き家や空き店舗が目立ってきているという指摘が聞かれた。また、1 市 5 町が合併したことで、地理的距離ばかりでなく行政との心理的距離も遠くなったのではないだろうか、という声があった。このため、市民と行政との協働を促進するシンボリックな拠点を、蔵の街に存在する空き家などを活用して設置する必要があると考えた。

蔵の街のフィールド調査（本年 10 月 1 日）において、活気のある場所が少ないことに気づいた。人は見かけるものの、住民がどこで何をして過ごしているのかを垣間見ることはなかった。それでは市民や観光に訪れた人は蔵の街を、つまらない寂れた町と誤解してしまう恐れがある。そこで市民、観光客の目に留まりやすい場所に活気の溢れるスペースを作る必要があると考えた。

また、蔵の街らしさが市役所周辺やメインストリート（蔵の街大通り）の一部にしか見られないため、最寄り駅（栃木駅、新栃木駅）から中心地にかけては蔵の街をさほど感じる事ができない。加えて、蔵の街は魅力のあるところが点在していることから、観光客にとっては若干物足りなく、魅力のあるところもただ単に見るだけであり、真の魅力や価値が分からず面白みが半減している。そのため、新しいカタチの観光案内、つまり、蔵の街に観光の新たな風と光を吹き込む観光案内の手段が必要だと考えた。

3. 提案の内容

■提案① 新卒採用多機能シェアハウス

- (1) 詳細：2 階建ての蔵造りの建物を栃木市役所の新卒採用者、地域住民のシェアハウスとして活用する。新卒採用者の中でも比較的蔵の街から遠い地域に住んでいる人を中心に、最低でも 2～3 年ここに住んでもらい、地域の方々との交流を通して地域理解を深めるとともに、協働のコモンセンスを磨いていただく。交流の機会を増やすために 1 階にはコミュニティスペースを設ける。新卒採用者はコミュニティスペースの運営、イベント（ミニシンポジウム、駄菓子屋など）の企画・運営を行う。また、ゲストハウスとしての機能も備えるため、観光客が泊まれる部屋を 1～2 部屋用意する（鹿沼市にある旅館 CICACU が好例）。内装や間取りの変更などは基本的に新卒採用者（つまり、居住者）によるセルフリノベーションとするが、市民、小山高専の建築専攻の学生などのボランティア参加も募ることとする。また、建築など専門家のサポートも適宜仰ぐ。シェアハウスの清掃、維持管理等は居住者が交替で行

うものとする。

CICACU とは

日光例幣使街道沿いに建つ、街の変遷と共にひっそりと閉館した江戸時代創業の旅館を鹿沼の魅力伝えるため再生させたゲストハウス。

- (2) 運 営 者：栃木市役所、居住者、地域住民
- (3) 運営方法：土地及び蔵の確保または賃借は市が行う。維持費は主に居住者の家賃とし、不足する場合は市が負担する。コミュニティスペースは有料にし、その場の運営費に充てる。
- (4) 効 果：多様な機能を一箇所に集約することで幅広い交流が生まれ活気の溢れる場所を形成することができる。新卒採用者は交流を通して地域理解を深め、地域の人は市役所の存在をより身近に感じることができる。お互いが相手を近くに感じることで市民協働の体制が強固になる。



写真1 ゲストハウススペースの
ゲストルーム例 (ステイ日光ゲストハウス)

資料： <https://travel.rakuten.co.jp/HOTEL/149157/149157.html>



写真2 コミュニティスペースでのイベントのイメージ(ゲストハウス・ココロココ)

資料： <https://cocolococo.jp/7219>



出典：栃木の町並み 蔵造りに関する調査報告書



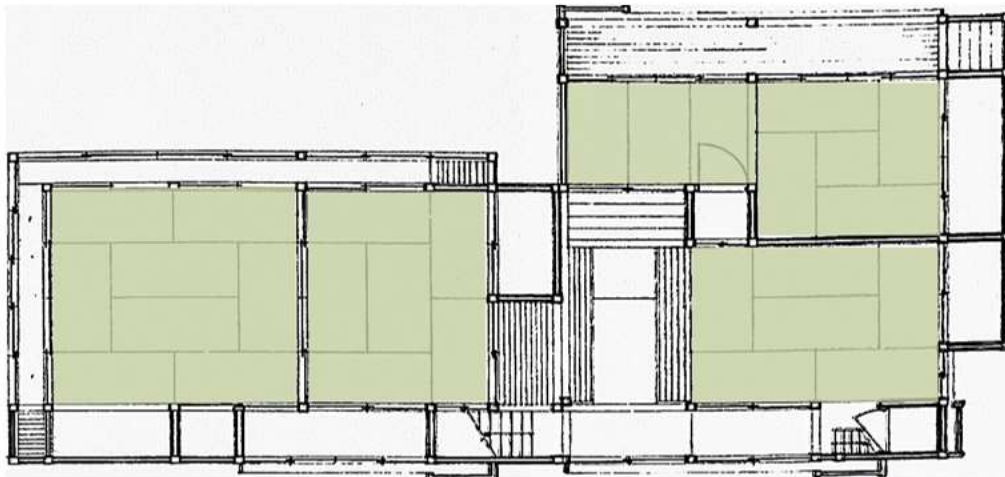
出典：栃木の町並み 蔵造りに関する調査報告書

図1 新卒採用多機能シェアハウス1Fの例



写真3 シェアハウスの例（横浜スマイルシェアハウス）

資料： http://smilesharehouse.com/?page_id=1261



居住空間

出典：栃木の町並み 蔵造りに関する調査報告書
 図2 新卒採用多機能シェアハウス2Fの例

■提案② 蔵の街オリジナル人力車

- (1) 詳細：トゥクトゥクという三輪タクシーを蔵の街オリジナルのデザインにし、栃木市の新たな名物、つまり「蔵の街オリジナル人力車」として導入する。人力車は2名定員が多いが、トゥクトゥクは運転手1人と乗客3人まで乗車できるためグループでの利用にも対応できる。栃木市商店会連合会が保有しているトゥクトゥクを借用して、蔵の街オリジナル人力車としたい。蔵の街の外観に合うようなデザイン（木目調、漆喰等）にし、運転手は車夫に倣った格好をする。拠点は新卒採用多機能シェアハウスに構える。送迎と観光の両方で週末や祝日など人が集まるときにイベント的に運営する。送迎は栃木駅及

び新栃木駅～シェアハウス間を、観光は主に蔵の街通り～例幣使街道～巴波川沿い～遊覧船発着所～蔵の街大通りを循環する。



図3 トウクトウクの経路のイメージ

- (2) 運 営 者：NPO 法人…地域住民、宇都宮大学の学生、小山高専の学生、栃木市役所新卒採用者等で組織する。
- (3) 運営方法：道路交通法の関係上乗車賃を徴収することは難しいので、募金、ステッカー等小物の販売、蔵の街にある店舗でのみ使える金券の販売で運営費を賄う。もしくは、観光案内の代金として料金を頂く。
NPO 法人内で土日祝日のシフトを組み、拠点に待機するスタッフで運転手を割り振る。
- (4) 効 果：現代版人力車として若者にも十分アピールできる。写真映えすることから SNS 等による発信で若者に知ってもらいやすく、高齢者の方々には便利な移動手段として認知してもらえる。また、蔵の街をよく知る運転手のおすすめのお店、順路、観光客の行きたい場所を提供できるため観光をより一層楽しんでもらうことができる。

■提案③ 蔵ローテーションイベント

- (1) 詳 細：蔵の街の住人の協力を得て、蔵の空きスペースを活用したイベントの企画・運営を行う。イベントとしては、ミニシンポジウム、講演会等に加え、子どもから大人まで楽しめる駄菓子屋やミニシアター等娯楽的なものまで幅広く行う。従来のように一箇所にとどまった企画・運営をするものではなく、複数の場所を利用し企画運営する形とする。

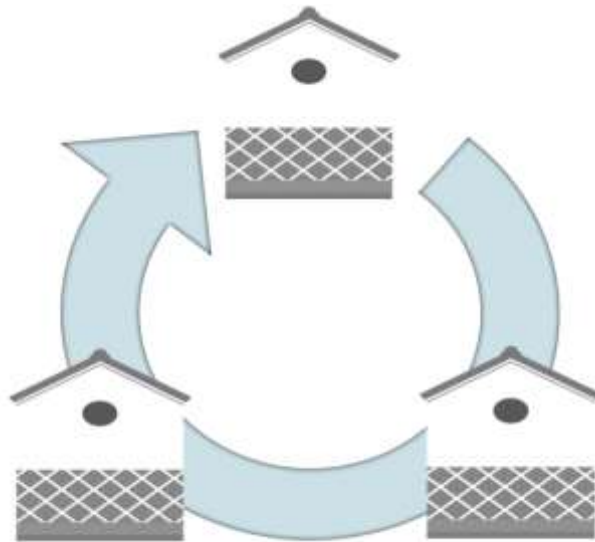


図4 蔵ローテーションのイメージ

- (2) 運 営 者：地域住民、栃木市役所新卒採用者
- (3) 運営方法：会場となるいくつかの蔵をローテーションで一時的に借りる。イベントは月のはじめから半ばで企画し、月末に開催する。イベントの企画は主に地域住民が中心となってすすめる。栃木市役所新卒採用者は積極的にイベントに参加し、地域に親しむ。
- (4) 効 果：1つの蔵をイベント会場するとその蔵にのみ大きな負担がかかってしまうが、イベント会場をローテーションすると負担が分散され継続的にイベントを開催することができる。また、複数の店舗でのイベントによる集客効果を見込めるようになる。



写真4 蔵を使ったワークショップの様子
(2013年8月陣内研究室撮影)

「タイムトラベル蔵の街」

○桐下駄の日

○蔵ディング

○タイムトラベル蔵の街

宇都宮大学教育学部陣内研究室 飯見真子 菊地咲樹

1. 目的

栃木市の活性化を目指す、蔵の街を活かした観光まちづくり

- ・蔵の街の特徴である様々な時代観をより分かりやすくし、ブランディング化を図ることで、歴史的な景観が好きな若者へアプローチをかけ、幅広い年代の観光客に訪れてもらうようにする。また、蔵の街でしかできない体験を用意することで、近年注目されているコト消費型の観光を促進する。
- ・蔵の街の付近に住む市民自身が蔵の街の歴史や文化を理解する機会を作ることで、自らが暮らす街の魅力を再発見し、愛着を持ち自分から魅力を発信したくなるようにする。
- ・他県のみならず栃木市内の他の地域の住民にとっても、蔵の街を知るきっかけを作る（スモールツーリズム）。
- ・駅に蔵の街らしい魅力を加え、観光客の電車利用を促すことで主に観光客の自動車交通の抑制を目指す。
- ・下駄イベントを開催することで特産品の一つである「桐下駄」を、効果的に周知する。

2. 背景

- ・蔵の街は様々な歴史を感じられる街である。
- ・観光客の年齢に偏りがある（本年10月1日の街歩きにて感じた）。
- ・栃木市は広いため、蔵の街への理解が十分でない市民がいるものと考えられる。
- ・蔵の街の道路は狭いところが多く、観光客が増加すると道路が混雑し危険が生じることが予想される。
- ・栃木市の特産品があまり周知されていない。
- ・コト消費が注目されている。

【モノ消費】

個別の製品やサービスの持つ機能的価値を消費すること。価値の客観化（定量化）は原則可能。

【コト消費】

製品を購入して使用したり、単品の機能的なサービスを楽しむのみでなく、個別の事象が連なった総体である「一連の体験」を対象とした消費活動のこと

引用：平成27年度地域経済産業活性化対策調査（地域の魅力的な空間と機能づくりに関する調査）報告書

3. 運営

『タイムトラベル蔵の街実行委員会とは』

蔵の街の店主や多くの市民、学生で構成する組織であり、タイムトラベル蔵の街の様々な取り組みをプロデュース、コーディネートする本プロジェクトのエンジンである。衣装を預かり、洗濯や管理をし、イベント当日着る人に受け渡しをするなど様々な管理に加え、広報、運営を本実行委員会が担う。蔵の街の店主が主体となり常時所属し、年度ごとに新たなメンバーを募集し運営する。メンバーは一般市民から市役所職員、学生など幅広く募集。またボランティア登録を行い、多くのボランティアが必要な時には登録してある人に募集をかけるようにする。

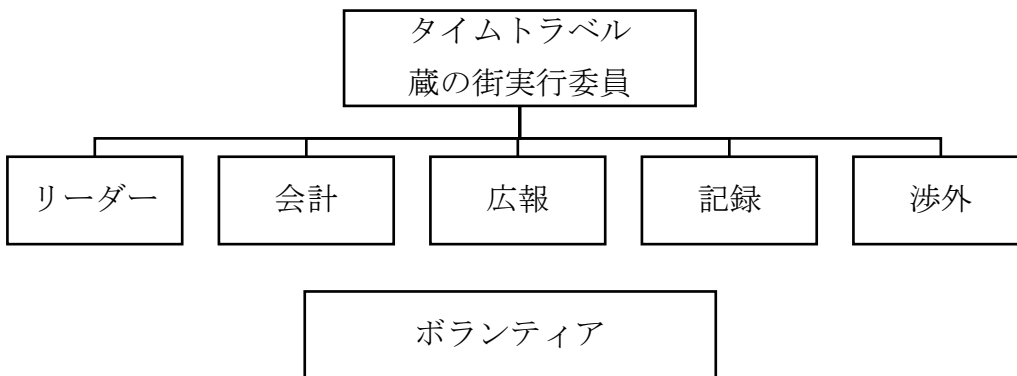


図1 タイムトラベル蔵の街実行委員会の組織図

4. 提案

(1) 桐下駄の日

1) 目的

- ・蔵の街の古風なイメージを利用することで、栃木市の特産品である「桐下駄」をアピールし、桐下駄割引などを行い飲食店等の利用を促進することで、栃木市の商業の発展を狙う。
- ・自動車交通量を増やさないために駅の利用を促す。
- ・桐下駄を履くことで栃木市民の健康を増進させる。

2) 概要

桐下駄の日＝栃木市の伝統工芸品である桐下駄を履くことを推奨する日

① 栃木駅及び新栃木駅の駅員が桐下駄を履くことで駅に「蔵の街らしさ」を取り入れる。

着物や着物風衣装も合わせてもよいが、普段の制服に桐下駄を合わせることで桐下駄のファッションとしての可能性や応用性、普段使いできることを広めることができる。またその意外性がむしろ話題にもなると考える。駅のデザインを蔵の街らしくするというハード面を変えることは難しいが、これなら比較的容易に駅に魅力を生み出すことができ、観光客の駅の利用を増進させることができる。駅員が桐下駄を履いていることに気づいてもらうために、駅構内に桐下駄を履いていることを知らせる掲示を行う。「この柄の桐下駄を探せ」などゲーム感覚で見てもらえる工夫をする)

※桐下駄を履く頻度は駅との相談の上業務に支障がない範囲で決めていただく。

②市役所職員が定期的に市役所内で桐下駄を履く。

このことにより、徐々に市民に桐下駄を浸透させ、市民が桐下駄を履いてみたいと思える

ような土台を作る。桐下駄を履く頻度は週に1日程度とする。桐下駄を履いても支障がない職員は必ずその日には桐下駄を履くようにし、普段は任意とする。多くの市民の目にとまるようになるべく頻繁に履くようにしたい。

③一般参加の桐下駄の日を開催する。

桐下駄を履いている人が飲食店で割引サービスが受けられるなどの、「桐下駄特典」も用意する。対象となるのは蔵の街を歩く全ての人であり、観光客だけでなく地元の人にも楽しんでほしい。また、蔵の街で桐下駄を販売しているお店に協力していただき、低コストで桐下駄を楽しめる桐下駄のレンタルや桐下駄の日のみの値下げなどをお願いしたい。さらに「桐下駄作り体験」、「桐下駄飛ばし選手権」「桐下駄アップダンス」などのイベントを開催して大人から子供まで桐下駄に親しめる日とする。開催日は7月22日が既存の桐下駄の日であるため、毎月22日の月1開催。週末に固定しないことで週末都合が悪い人でも参加できるというメリットもある。

(2) 蔵ディング (クラディング)

1) 目的

- ・蔵の街をいろいろなシーンで活用することで、蔵の街の認知度を上げる。
- ・協力した店に利益が生まれることで地元経済を潤す。
- ・蔵の街に住んでいる人々が特技を活かせる、市民参加ができる場を作る。

2) 概要

蔵の街のあちらこちらを活用して結婚式を行う。江戸の庶民文化のような質素だが温かい雰囲気での結婚式を目指す。遊覧船に乗って、巴波川を下るのも風情があってよい。運営主体は前述した「タイムトラベル蔵の街実行委員会」とし、地元の店主や中高生を含む一般市民、國學院大學栃木短期大学の学生、服飾系専門学校（ヤマトファッションビジネス専門学校）の生徒など栃木市に来ている学生に手伝ってもらい運営する。それぞれが持つ得意分野（例えば着付け、ヘアメイク、写真を撮るのが得意等）を活かされるとよい。場所の候補としては、①栃木旧市役所、②蔵の街大通りに面していて空き家になっている蔵（持ち主がいて店を開くことなどはできなくても結婚式で使う数日だけならOKなどがあれば）、③1班の提案にあるコミュニティールームを考えている。

江戸の庶民文化のようなごんまりとした 温かい雰囲気



※
イ
メ
ー
ジ

出典：NOAIDEA.ME, ふじのくににささえるチカラ 大幡龍柏屋・一祥庵

地域で行うことによるアットホームな空気感

(3) タイムトラベル蔵の街

1) 目的

- ・様々な時代観のある蔵の街の良さを活かして、新しい見せ方をすることで高齢世代だけでなく若い世代にまで親しみを持ってもらい、幅広い年代の観光客を呼び込む。
- ・栃木市の他の地域に住んでいて蔵の街をよく知らない市民が蔵の街の魅力を知る。(スモールツーリズム)
- ・蔵の街の歴史や文化を学ぶことで住民が地元へ愛着を持ち、住民一丸となって一つの物を作り出すことで地域に交流をもたらす。
- ・観光客による土産物の購入、着物のレンタル、飲食店の利用を増やすことで地元経済を潤す。また蔵の街を通して栃木市全体の認知度を上げる。

2) 概要

タイムトラベル蔵の街実行委員の店主や学生ボランティア、市役所職員が蔵の街周辺の時代観(写真1参照)に合わせた服装をする。蔵の大通りを江戸時代と明治時代、みつわ通りを大正時代と昭和時代、巴波川沿いを江戸時代とした。(図1参照) 衣装の種類は着物、袴、1970年代の服などである(写真2参照)。さらに、蔵の街の歴史や文化を学ぶ講習会などを行うことで、容姿だけでなく立ち居振る舞いから当時の町民を演出できるようにする。まるで街全体が生きた博物館になったようなイメージである。講習会の講師は歴史に詳しい市民や大学教授等が好ましい。ボランティアが観光客に質問されても答えられるようになるのが理想である。衣装は持っている人に提供あるいは貸し出しをしてもらう。ボランティアに対しては無料で衣装の貸し出しを行う。観光客は「博物館を見に来たお客さん」という設定のため普段着で見ていただいてもよいが、時代の一部になりたい観光客向けに蔵の街の呉服屋さんが有料で着物の貸し出しや着付けを行っていることをうまく宣伝する。予約なしでの対応ができるようにする。また、あえて期間を広報せずに不定期で開催することで、観光する側にはワクワク感を作りだし、一方でイベント時に来訪者を集中させない効果も期待できる。加えて、コスプレをして写真を撮るスポットとしてもアピールする。その場合は普段の不定期のタイムトラベル企画とは別に期日を決めて広報する。コスプレして来た客には飲食割引や小道具の無料貸出などを行う。



撮影：発表者



江戸・明治

写真1 時代観のある景観の例

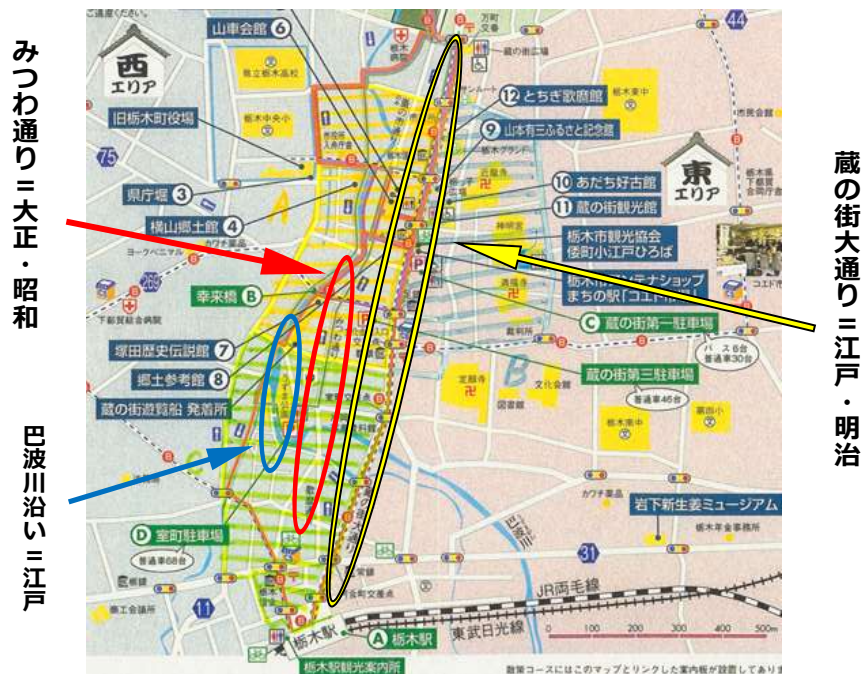


図1 蔵の街の時代区分



江戸～文明開花以前
左は小袖の町娘
右は男性の旅姿



文明開花～大正前期
・和洋折衷
・ハイカラ
・着物×ブーツ

大正後期～昭和初期
モダンガール・モダンボーイ

写真2 各時代のファッションのイメージ

引用文献

「引廻し合羽をつけた道中姿の町人・江戸時代・小袖文化の完成」日本服飾史 資料・風俗博物館～よみがえる源氏物語の世界～

http://www.iz2.or.jp/fukushoku/f_disp.php?page_no=0000151

「大正時代の服装の特徴とは！和装×洋服が主流だった？」KAMOME TIMES

<https://kamome-times.com/archives/4982.html>

「海外がビビった。戦前の日本人女性のファッションがモダンすぎる」ジモトのココロ

<http://jimococo.mag2.com/zenkoku/12628>

「2013年5月27日の記事」モダンガール復興計画

<http://projectmoga.jugem.jp/?day=20130527>

「市民が輝ける街蔵の街」

○長屋プロジェクト

○和装ラン

宇都宮大学教育学部陣内研究室 大木優奈 落合安純

1. 目的

「蔵の新しい利用方法により蔵の街の魅力を発見・発信することで観光客を獲得する。
また、市民が中心となって活動することで市民の活気あふれる街を創造する」

2. 街歩きをして気づいたこと

栃木市は心が落ち着くような街の雰囲気があり、写真映えする景観が多く見られた。メインストリートでは写真を撮る際も、歩道の幅が広く、人の迷惑にならずに撮ることができる。歌麿通りはシャッター商店街のため、特に人通りも車通りも少なく写真が撮りやすい状態であった。緑も多く、路地裏まで道の舗装がしっかりしていて歩きやすく、街歩きをするにあたって心地よい景観であると思われる。しかし見所が散らばっていて広域であり歩き疲れてしまう上、誘導してもらわないとどこに何があるかわからない。また落ち着く環境ではあるが子供が遊べる場所は少なく、家族連れが観光する際に入れるところがない、ショッピングできる場所があまりないため、短時間しか滞在してもらえないなどの短所が見つかった。

また、中心市街地では特色によって大きく三つのエリアに分けられることに気づいた。一つ目はお寺が多くあるゾーン、二つ目は「うなぎの寝床」と呼ばれる間口の狭く長い奥行の敷地の店蔵（以降長屋と称す）が多くあるゾーン、三つ目は店の一つ一つが個性的で、歌麿の絵がどこのお店にも飾られている歌麿通りゾーンである。①お寺ゾーンは広々とした空間が多く、地域の人憩いの場となっていた。各お寺には裏話のようなものがあり、ガイドさんがいないとわからない面白い話がたくさんあった。②うなぎの寝床ゾーンには昔ながらの雰囲気が色濃く残っているが、中にはおしゃれなお店もあった。うなぎの寝床と呼ばれる長屋の中は通り庭を通して奥まで進むことができ、このような建物に入ったことがない学生からすると非常に魅力的なものであった。しかしお店は閉鎖的で、奥まで入りづらい雰囲気があった。③歌麿通りは多くのお店のシャッターが閉まってしまっていたが、空いているお店は個性的でユーモアにあふれていた。また、歌麿通りではガイドさんが「ここのお店は〇〇があった」とたくさん思い出話を聞かせてくれ、今はシャッターが閉まっていて若者には特に魅力を感じない場所であっても、もっと上の世代の人には思い出の詰まった魅力のある場所であることがわかった。



写真1 お寺ゾーンの建物の例 (撮影：発表者)



写真2 うなぎの寝床ゾーンの建物の中 土間のような通庭があり奥に行けるのがわかる
(撮影：発表者)



写真3 うなぎの寝床ゾーン 長屋の建物の外側 一つの建物が長く伸びていることがわかる
(撮影：発表者)



写真4、写真5 歌磨ゾーンのお店の例 個性的なお店が多い (撮影：発表者)



図1 蔵の街のんびり散策マップ(栃本市観光協会 HP より) 西エリアと東エリアを主に街歩きした。(エリアは右側の楕円から、お寺ゾーン、うなぎの寝床ゾーン、歌麿ゾーン)

3. 提案

街歩きをしてみて気づいたことを踏まえ、私たちが提案するのは以下二つである。

① 長屋プロジェクト

概要：うなぎの寝床と言われる長屋をリノベーションし、市民も観光客も楽しめる施設をつくる。長屋の性質を利用し、駄菓子屋、古着屋、休憩スペース(ゲストハウス)という対象となる世代の異なる店舗をひとつの建物に合わせることで長屋の中で様々な世代・生まれの人が行き交い、コミュニケーションが容易に取ることのできるスペースを創造する。

目的：長屋の魅力周知及び観光客と市民間交流による新しい観光の創生
長屋を通じた世代間交流の促進

対象：市民と観光客(いづれも年齢問わない)

運営者：リノベーション→業者・市民

管理→長屋にもともと住んでいる人、社会貢献したいシルバー人材

駄菓子屋→國學院短期大学保育科の学生 宇都宮大学教育学部の学生

高校生ボランティア
古着屋→自分の古着屋を持ちたい若者
(市民かどうかは問わない)

提案：栃木市内にある長屋をリノベーションして、複数店舗が営業する施設を造る。現在昔ながらの長屋の空家はないそうなので、今お住まいになっている人の協力を得たい。長屋に独り住まいの高齢者の方に、社会貢献活動として長屋の休憩所と建物自体の管理をお願いすることで、住んでいる人も輝ける場となれば良いと考える。店舗は子供向けの駄菓子屋、若者向けの古着屋、ゲストハウスとして泊まることもできる休憩所の三つを提案する。休憩所は誰でも自由に使うことができ、観光客がホッと息を付け、寝転がって休むことさえできてしまう場であり、市民の憩いの場を想定する。ここでは観光客の人がおすすめの場所等を市民に気軽に聴くことができ、ガイドマップにはない市民おすすめの場所へ観光に行くことができる。またここで市民と交流することで、観光客にとって栃木市にまたおずれたくなる場所をつくる。駄菓子屋は子どもに関わる学びをする大学生が学びの場として経営する。また、地域にありながらも独立しておりあまり関わりのないと思われやすい大学と市民の距離を、市内の長屋に学びの場を設け関わることで縮める効果を期待する。

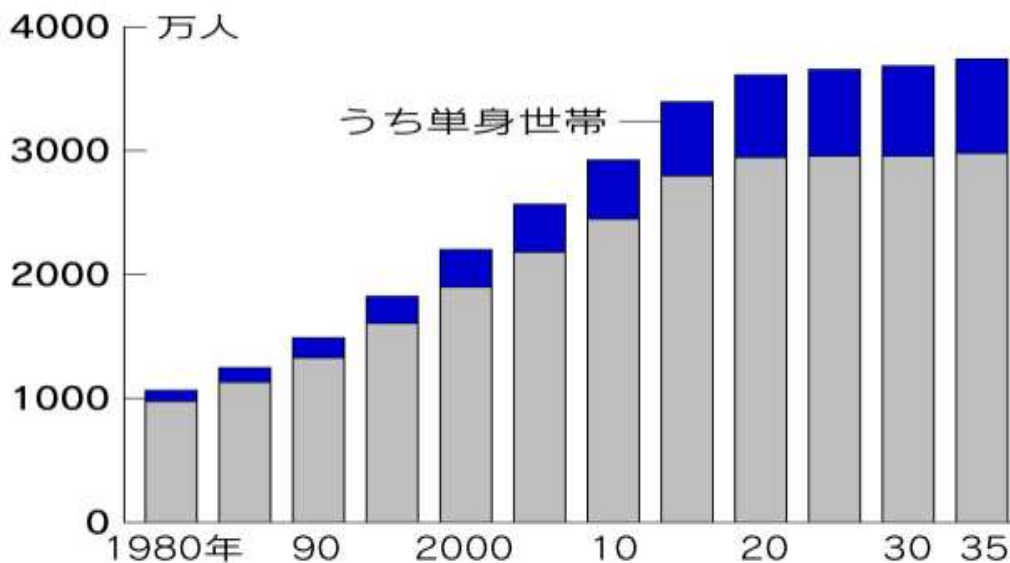
古着屋では、自分の古着の店を持ちたいと考えている若者へ、安い家賃で働ける場所の提供をする。古着は栃木市にお住まいの方のたんすに眠っているもう着ない服、思い出の服を提供してもらい服から世代間交流をすることができる。また提供という形をとるので、コストが抑えられる。対象となる世代の異なる三つの店舗を長屋という一本の通路でつながった店に一つにすることで、長屋の中がさまざまな世代の人が入り乱れ、多世代交流が容易に可能となる。

社会的効果：

- ・単身世帯の高齢者について

全国の単身世帯数は年々増加傾向にある。総務省の国勢調査によると、全国の65歳以上の高齢者人口は2010年時点で約2924万6千人と05年比で13.9%増えた。65歳以上の単身世帯は約479万1千世帯で、高齢者人口の約16.4%に上る。1980年には約88万人だった単身世帯数は2010年には約480万人と右肩上がりだ。現在の栃木市の高齢者世帯数の状況は、65歳以上の高齢者がいる世帯数は26,825世帯で全体の世帯数の47.6%に上る。この数値は全国平均より上回っている。高齢者単身世帯数は4,287世帯で、全体の7.6%であり、県の平均7.1%を上回っている。(栃木市高齢者保健福祉計画・介護保険計画より)

65歳以上の人口



(注) 2015年以降は推計。国勢調査と国立社会保障・人口問題研究所の調査による

図2 65歳以上人口の推移と推計 (日経新聞 2013/4/8)

5

■高齢者のいる世帯数(平成22年) (単位:世帯)

区分	栃木市	栃木県	全国
一般世帯総数	56,409	744,193	51,842,307
65歳以上の高齢者のいる世帯数	26,825	291,165	19,337,687
高齢夫婦世帯数	5,709	65,235	5,236,338
(一般世帯総数に占める割合)	10.1%	8.8%	10.1%
高齢単身世帯数	4,287	52,870	4,790,768
(一般世帯総数に占める割合)	7.6%	7.1%	9.2%
その他の世帯数	16,829	173,060	9,310,581
一般世帯総数に占める割合	47.6%	39.1%	37.3%

資料:国勢調査(平成22年10月1日現在 旧西方町、旧岩舟町を含む)
 高齢夫婦世帯数:夫65歳以上、妻60歳以上の夫婦1組のみの一般世帯

表1 栃木市高齢者保健福祉計画・介護保険計画より

高齢者の単身世帯では高齢者の認知症の進行、孤独死等の問題がある。対策としては社会ができることは高齢者が社会との接点を持ち続けられるようグループ活動などを行いやすくするための体制づくりなどが必要である。この提案によって単身世帯の方が多くの人と関わる機会を得ることになり、単身世帯の問題を改善できるとともに生きがいを作ることができる。

・多世代交流について

この提案の一番の魅力は長屋という特性を生かして多世代交流することができる点である。地域社会においては、高齢者の単身世帯の増加と孤独死、子育ての相談相手がなく、しつけ方が分からない親による育児放棄や児童虐待など、各家庭の孤立を背景とする問題が顕在化している。生活基盤・経済基盤が弱いままでは、子どもを授かっても育児放棄や児童虐待、非行や少年犯罪につながってしまうおそれがある。「多世代交流・共生の取組」は、全体として人口が減少していく中においても、すべての人が安心して暮らし続けられる明るい地域社会(コミュニティ)をいかにして形成していくべきかを模索するものである。平成26年度、全国市長会が出生率の高い都市自治体に対して行った調査では、出生率が高い要因は、

- ② 地域コミュニティの充実
- ② 育児支援が受けられる親族や友人・知人の存在
- ③ 子どもの成長に対する地域社会の高い関心

が挙げられている。問題は人口減少そのものではなく、その中でいかに世代間のバランスを取り、地域社会(コミュニティ)で市民が支えあう仕組みをいかに育てていくかにある。多世代交流には高齢者の生きがいと、子育て支援を地域ぐるみで行う契機になればというねらいがある。長屋では親が古着屋を見ている間に休憩所で地域の人と遊んだり、駄菓子を買って楽しめたりするので子供の成長を地域の大人が見守れる場となるため、よりよい地域コミュニティを築く場となることができる。

<提案の効果のまとめ>

- ・長屋の中で世代の違う市民や観光客との間にコミュニケーションの場が生まれ、観光客にとって栃木市にまたおずれたくなる場所をつくる。
- ・市民の間においても居場所ができ、地域内の人の交流につながる。
- ・大学と市民間の距離を縮める
- ・若者や高齢の方が輝ける場になる
- ・地域の人が見守れることのできる場となる

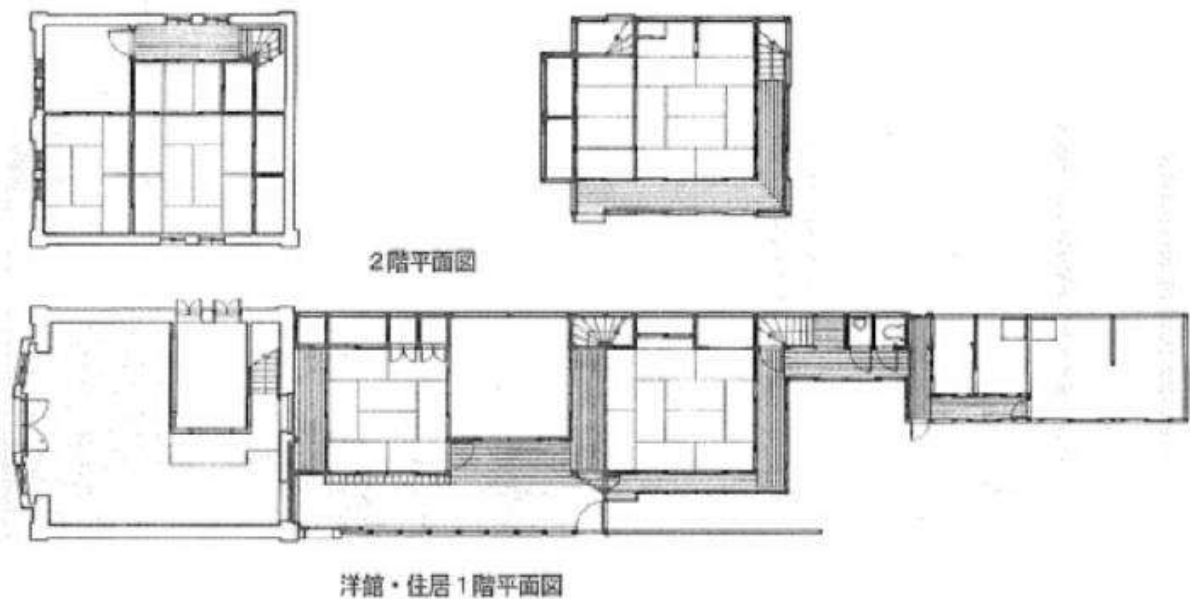


図3 長屋一例 関根家 間取り（平成17年度内 観光自然保護調査 栃木の町並み景観）

②和装ラン

概要：現在巷ではやっている「ファンラン」の栃木版を実行する。これは最近のトレンドである「フォトジェニック」を前面に押し出すことで若い観光客の誘致を目指す。また休憩ブースなどで市民が活躍できるようにする。

※ファンラン…ファンランは、さまざまな趣向でランニングを楽しむ米国発祥のイベント。仮装やコスプレをしたり、スイーツを食べながら走ったりする大会が国内でも開かれている。

※フォトジェニック…写真映えのこと、若者の間で流行語となっている。

目的：蔵のまちを活かした観光客誘致、市民の輝ける場の創造

対象：市民と若い観光客

運営：ブース→高校生蔵部や学生ボランティア、一般のボランティアスタッフ
全体の運営→市役所、学生

提案：街中を和装で走って回るイベントを行う。イベント参加者自身が和服を着ていることで蔵などの建造物だけでなく自分自身も写真映えすることができ、より街の景観を楽しむことができる。休憩地点では高校生や市民の運営するブースにて様々なことを体験できる。（例：高校生ブースにて、栃木市の高校の茶道部によるお茶体験、寺ゾーンのブースでは写経体験やパワースポット体験など）高校生のブースでは高校生が主体となって企画や運営をするので高校生自身が輝ける場を作り出す。このイベントの目的は普通のマラソンとは違って「走ることを楽しむ」のではなく、自分が街と一体になる空気感や、写真などを回りながらとってもらい「楽しみながら走る」という部分がポイントである。栃木市は見どころが散らばっていて、ただ歩くだけでは疲れてしまったり飽きてしまったり、誘導してもらわないと自分だけではどこに何があるのかわからない等の問題点をこの楽しみながら走るイベントで改善することができるのではないかと考える。ランニングコースとして設定し、実際に見たり写真を撮ったりしながら回ることで距離の遠さを感じさせないで回ってもらいすることができる。また、普段メインストリートしか歩いたことのない人や、路地にはわかりづらく入っていきづらいと考える観光客の人も路

地裏がコース設定されれば、魅力的な場所を個々人が発見することができ、一回来たことがある人でも新鮮な気持ちでイベントに参加できると考える。また各ブースでは各観光場所の説明や栃木市の昔話、寺ゾーンの一つ一つの寺の裏話などを聞けたりもし、栃木市のことをより知ってもらうことができる。さらにこのブースでの活動は、合併により栃木市内とはいえ中心街のことはよくわからないといった市民（藤岡・西方の人など）が参加すれば、栃木をもっと知り、栃木市民としての実感を与える効果も期待できる。フォトジェニックスポット（写真スポット）を作るという点では、シャッター商店街となっている歌麿通りを小・中学生、高校生がシャッターに昔そこにあった店の絵や、生徒の思い思いの絵を描くことで賑やかで写真映えする場所とする。イベントが終わった後も自分が書いた場所が残っていくことで市民の街に対する愛着が増長する。イベント参加者がイベントでの写真を SNS 等に投稿することでイベント参加者自身が情報の発信源となり、栃木市の広報が簡単に、かつ広く波及する。



写真 6 歌麿通りの様子（撮影：発表者）

イベント規模など参考：

○富山市 「アメイジングラン！」

「アメイジングラン！」は夜の富山市中心市街地を走るファンランイベント。今年は 10/1 に行われ、定員は 520 名、参加費は 2500 円だ。約 500 人のランナーが仮装&光るグッズを身につけてライトアップされたまちなかを駆け抜けた。スタート・ゴール地点の広場では、地産の食材をたっぷり使った軽食が楽しめる完走パーティーが開催された。タイム計測のないファンランイベントで、コースは歩道を利用。交通規制等はなし。

○佐野市 「第 1 回 さの縁結びラン」

昨年の 11 月 27 日（日）に行われたファンランと婚活を融合させたイベント。定員は独身男女各 50 人。参加費は男性 5000 円、女性 2000 円。コースは、同市高萩町の佐野短期大学を出発し、佐野厄除け大師や市役所前の「さのまるの家」などを巡り、同短大に戻る約 9 キロ。コース沿いには和菓子店や酒造会社など数カ所の立ち寄りポイントがあり、参加者にみそまんじゅうなどがふるまわれる。走り終えた後のフリータイムには佐野らーめんなどが用意され、参加者同士で親交を深めてもらう。また、同短大近くの「佐野プレミアム・アウトレット」で使えるクーポン券を配り、ショッピングも楽しめる。交通規制なし。

栃木市の人口規模 162152 人（栃木市 HP 平成 29 年 11 月末日現在町内別世帯数及び人口一覧表より）に対し、富山市は 417,966 人（富山市 HP 平成 29 年 10 月末日現在）、佐野市 119,894 人（佐野市 HP 平成 29 年 11 月 1 日現在）であることから、交通規制なしのイベントの規模としては佐野市寄りの 100 人～200 人にとどめるのが良いのではないかと。

<提案の効果のまとめ>

- ・観光客誘致（栃木市内でのスモールツーリズムも含む）
- ・高校生や市民のブースによって、一人一人が輝ける場の創造
- ・アートを使った景観の改善及び市民の思い出の場創造
- ・観光客の発信力によるイベント後の観光客獲得

<参考資料>

栃木市 HP <http://www.city.tochigi.lg.jp/hp/menu000006000/hpg000005784.htm>

栃木市観光協会 HP <http://www.kuranomachi.jp/sightseeing/pamphlet.php>

日本経済新聞 HP

https://www.nikkei.com/article/DGXNASDG0302E_X00C13A4CC1000/

富山市 HP

<http://www.city.toyama.toyama.jp/kikakukanribu/johotokeika/tokei/jinkosetai/jinkosetai.html>

「くらしたい国、富山」推進本部 HP https://toyama-teiju.jp/event/0727_amazing_run

佐野市 HP <http://www.city.sano.lg.jp/profile/02.html>